

## 恋の表し方

野瀬 隆平

「恋」の表現といっても、恋心の伝え方のことではない。

古代から日本には恋(コヒ)という言葉があり、万葉集にも恋の歌が収められている。関心を抱いたのは、万葉仮名で「コヒ」と書く場合、どのような漢字が使われたかである。ある学者の調べによると、万葉集にはコヒが含まれる歌が六百例以上あるという。問題はこの音に対してどのような文字が使われたかだ。

ずばり「戀」という一字で表記されることが最も多いのであるが、「コ」と「ヒ」に対してそれぞれ一文字ずつ漢字が充てられている場合もある。では、それはどんな字なのか。

「コ」に対しては、古、故、胡と孤が使われており、

「ヒ」には、非、飛、悲と比が使われている。

興味深いのは、必ずしも二文字の組み合わせが常に同じではないことである。一番多い組み合わせは、「古」と「非」、すなわち「古非」で、五十一例あるという。次に多い表記法は、「孤」と「悲」の「孤悲」で、二十九例ある。現代の我々が考えると、孤独で悲しいものとの連想から、孤悲が最もふさわしいと思うかも知れない。

しかし、古非についても、もと(故≡古)はしか非ず、恋する前はそうでなかった。恋をして自分が変わったと感じて、この文字を充てたのだという穿った解釈をする人もいる。これも成るほどと思える。

ちなみに、それぞれの表記を使った歌の例を示す。

古非は、

……古非尔之奴倍之…… 恋に死ぬべし

……古非都追安流良牟…… 恋ひつつあるらむ

孤悲は、

……吾孤悲念乎…… 我れ恋思ふを

……孤悲尔不有國…… 恋にあらなくに

万葉仮名では、出来る限り言葉の意味に近い漢字を選んでいようだ。例えば、タカラ(宝)の場合は、タ、カ、ラの首を表わす漢字はいくつもあるが、「多可良」という組み合わせを使う。「多くて可で良いもの」が宝にふさわしいと考えるのである。これは、中国において、外来語を漢字で表わす場合、「コカ」「ラ」を「可口可樂」とするのと同じ発想である。